

# 匂いの哲学の転換

横 山 奈 那

## 0. はじめに

匂いの感覚である嗅覚が、哲学の中で論じられることは非常に少ない。その理由として二つのことが挙げられるだろう。第一に、西洋哲学において、嗅覚を含む感覚は認識の拠り所にならないとする理論が主流だからである。第二に、五感の位階序列において、嗅覚を最上位とする理論がほとんど存在しないからである。プラトン以来、感覚の格付けでは視覚を頂点とする説が有力であった。視覚は最も知性との結びつきが強いと考えられるためだ。伝統的な感覚序列において、視覚は聴覚と共に高級感覚、嗅覚は味覚や触覚と共に低級感覚に分類される。とりわけ、嗅覚と味覚は自己保存の本能と結びつき、その機能は実用本位であるとみなされてきた。さらに、嗅覚は味覚に比べ、他者との感覚の共有が難しく社会性に欠けるため、これを最下位に位置づける説もある。

冷遇されてきた嗅覚が肯定的に論じられ始めたのは、18世紀のフランスにおいてである。ここに匂いの哲学における転換があるように思われる。そしてその背景には、あらゆる認識は感覚に基づくことを主張する感覚論の台頭があった。では、この時代において嗅覚はどのように考察されたのであろうか。この点を明らかにするため、まず第1章では本格的に嗅覚が論点にされ始める以前の17世紀のデカルト（René Descartes, 1596-1650）の言説と思想的な土壌とを概観した後、続く第2章では嗅覚を出発点として、感覚が精神の活動に貢献すると述べたコンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac, 1715-1780）の主張を、第3章では自然状態と文明状態の嗅覚について語ったルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778）の理論を、そして第4章ではブリア＝サヴァラン（Jean Anthelme Brillat-Savarin, 1755-1826）の19世紀における嗅覚と味覚の議論を取り上げる。これらを通して、本稿では匂いの哲学の転換について考察する。

## 1. 転換のための土壌

フランスにおいて、嗅覚ないし感覚に対する伝統的な捉え方を継承しているのは、デカルトである<sup>1</sup>。彼は『哲学原理』（1644年）において、感覚を7種類に分類した。五感と呼ばれる5種類の感覚を外部感覚とし、これに心の状態と飢えや渇きのような自然的欲求の内部感覚2種類を加えた。デカルトは感覚について以下のように述べる。

人の心（ame）は身体全体に命令するものであるが、そのおもな場所を脳髓の中に持ち、そこだけで理解し想像し、さらには感覚もする…【中略】…。そしてこの感覚は神経の働きによってなされる。…【中略】…神経によって脳髓の中に起こされた運動は、脳髓と緊密に結

びついている心あるいは精神を、その運動自身が多様であるのに応じて多様な仕方に変化させる。これらの運動から直接出てくる多様な精神印象あるいは思考が、感覚の覚知あるいはふつう感覚と呼ばれるものである。<sup>2</sup>

彼は視覚について取り上げた『屈折光学』（1637年）の中で、「感覚するのは心であって身体ではない」<sup>3</sup>と主張し、感覚することを思惟することとみなした。こうしたデカルトの姿勢はのちに批判の対象となった。例えば、20世紀の哲学者メルロ＝ポンティは視覚を思考として扱うデカルトに対し、「確かに、思考を伴わない視覚はない。しかし、＜見る＞ためには＜考える＞だけでは十分ではない」<sup>4</sup>と語り、デカルトによって排除された身体的側面から感覚を再考した。デカルトに倣って匂いを説明するならば、匂いの感覚はかくかくしかじかの匂いであるとする思念の中に存在する。

デカルトが嗅覚ないし匂いについて取り上げることは少ない。彼の標準的テキストとされるアダン・タヌリ版『デカルト全集』に収められた著作の内、『人間論』、「1640年9月30日付書簡」、『哲学原理』等の中に、それらに関する言及がある<sup>5</sup>。『哲学原理』ならびに『人間論』で、彼は嗅覚を生理学的に論述する。例えば『哲学原理』の「嗅覚について」では、活発な微小物体が、鼻孔で捉えられ、海綿状の骨を通り神経に達する、その際の刺激の多様性により嗅覚は生じると記されている<sup>6</sup>。この著作では、触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚、心の順で論じられ、五感はより外部にあるものから内部へ、最終的には心へと段階的に接近するように配置されている。このことは別の著作からも確認できる。彼は視覚を「最も普遍的で最も高貴」<sup>7</sup>であると語り、この感覚を「すべての感覚の内でも、欺くことが最も少なく、最も確実と考えられている」<sup>8</sup>触覚をモデルに説明した。彼は最も確実で疑い得ない、考える我、すなわちコギトを第一の真理とし理論を構築した。そして、感覚を考察する際にもこの方法を採用し、低級だが確実な感覚である触覚を用いて、視覚を論じた。またこうした視覚優位を主張するデカルトの感覚の格付けは、プラトン以来の伝統を受け継いでいる<sup>9</sup>。デカルトにとって、身体を介した感覚は、認識に直接貢献するものではなく、それどころか誤謬の契機ですらあった。それゆえ、思惟との関係が密接ではない原始的な感覚ほど軽視された。したがって、『哲学原理』に登場する感覚の順序がデカルトの感覚階位を表すと考えられる。さらに、プラトンの感覚序列では嗅覚は中間位である<sup>10</sup>。これをデカルトが踏襲しているため、彼が嗅覚を中間位に据えたことは、より一層確かであると思われる。この状況に変化が訪れるのは、18世紀のフランスにおいてである。

この頃、すべての認識は感覚に由来する、つまり、認識の源泉は感覚だと考える立場である感覚主義（sensualisme）が受け入れられていた。坂部恵は、近世に至るまで広く一般に認められた序列は、知性 intellectus = nous—理性 ratio = logos—感性 sensus = aisthēsis であり、「カントが『知性』と『理性』の序列を最終的に逆転」<sup>11</sup>したと述べた。感覚主義は伝統的な序列で低いものと考えられていた感性を認識の根拠とする。このことと、感覚主義の登場以降、嗅覚に言及する理論が増加していることを照らし合わせると、序列のうちで低級の感性を肯定的に論じることが可能になったという思想的背景、端的に言えば18世紀の認識論がデカルト的合理主義から感覚論へと移行したことが、低級感覚である嗅覚を考察する土壌を準備したと言えるのではないだろうか。例えば、感覚主義の典型を構築したコンディヤックは、嗅覚の考察を通じて、感覚から精神

のあらゆる機能を導き出すことが可能であると主張した。つまり、認識における感覚の役割の重要性を認めることと、感覚の一部である嗅覚を考察することとがコンディヤックにおいて結びつけられるのである。

## 2. 嗅覚を持つ彫像——コンディヤック

エティエンヌ・ボノー・ド・コンディヤックは、著書『感覚論』(1754年)<sup>12</sup>において、「われわれと同じように内部が組織され、その精神にはいかなる種類の観念も持たない」<sup>13</sup>大理石の彫像 (statue) を仮定した。そして、彼はそれに一つずつ感覚を与え、彫像の内部で起こる変化を考察した。この思考実験を通して彼が目指したのは、人間のあらゆる精神能力が感覚に帰せられると論証することであった。彼は知識の獲得に最も不適當と思われる「嗅覚」を彫像に与えることから出発する<sup>14</sup>。

我々は嗅覚から始めるのがよいと考えた。あらゆる感官 (sens) のなかで嗅覚は人間の精神の認識に寄与することが最も少ないと思われるからである。<sup>15</sup>

上記のように思われるのは、嗅覚から色、音、味、掂がり、形などの観念を得ることができないためだろう<sup>16</sup>。実際、五感の中で嗅覚が最も知的ではなく、我々に与える情報量が最も少ないと考えられている。さらに匂いはしばしば空気のようなもの、非実在的なもの、形のないものとみなされてきた。そしてそれを捉える人間の鼻は、アリストテレスが指摘するように動物の中で最も劣る<sup>17</sup>。以上を踏まえると一層、嗅覚は精神の活動とは無縁であると思われる。だが結論を先取りすれば、嗅覚しか持たない彫像は、最終的に人間の精神が行うすべての機能を備える。

最初の段階で、彫像は匂いを受容するだけであり、自らの、あるいは自らの感覚の外部に、いかなる観念も判断も持たない。この彫像がバラを感覚する時、彫像にとって自己とはバラの香りに他ならない。したがって、この段階では匂い以外の観念を彫像は持ちえない。

匂いに出会うとき、彫像の感覚する能力は器官の上に形成される印象に注がれる。これは「注意」と呼ばれる。この瞬間から彫像は、快い香りを楽しみ、不快な匂いに苦しむ。彫像が嗅いでいる匂いに対する注意は、匂いを引き留める。この時、注意の活発さの程度が印象の強弱を左右する。それが「記憶」となる。記憶は己の内にあり、感覚を思い出す時の原因となる。よって、彫像は活動的である。また、感覚を感じる際、その原因は自らの外にあり、感覚器官に作用する匂いの物体の中にあるため、彫像は受動的でもある。記憶が作る活動的注意は、二つの匂いを各々の「思い出」に分ける。この時、「比較」が生じる。その後、二つの匂いは比較され、何の匂いであるのかを「判断」される。匂いの記憶の内、強いものは現にあるものの如く過去を楽しませる。それを「想像」と呼ぶ。そして思い出し、想像する習慣が強まるにつれて、かつて持っていた感覚を彫像は「再認」するようになる。よって、「彫像は多くの習慣を作ったと結論付けよう。第一は注意する習慣、第二は思い出し、第三は比較し、第四は判断し、第五は想像し、最後の一つは再認する習慣である」<sup>18</sup>。

彫像は、現に感じている在り方とかつて感じた他の在り方に、同時に向ける注意によってのみ、匂いを「識別」する。匂いを弁別することを通じ、彫像は「数の観念」を持つ。また過去と

現在の匂いを識別することから「持続」の観念が生じる。彫像は悪い、もしくはよくない状態である時、過去の感覚を思い出して、現在の状況と比較し、かつてのよい状態に戻る「要求」を感じる。これが「欲望」となる<sup>19</sup>。そして欲望のうち、支配的なものの一つが「情念」である。彫像は快い香りを「愛し」、不快な匂いを「憎む」。これと同じ原理で「希望」と「恐怖」とが生じる。さらに欲望を満足させる希望は、同じ欲望を満足させた経験と再びそうなることを望む関心によって「意志」となる。ここで満足と不満足という「抽象的観念」を彫像は持つ。彫像にとって、一つの匂いは——例えば堇の匂いは花に共通する抽象的なものではなく——一つの「特殊な観念」である。この二つの観念に基づき、彫像は「一般的真理」と「特殊な真理」を認識する。したがって、コンディヤックは以下のように述べる。

我々の彫像は、注意を与え、記憶し、比較し、判断し、識別し、想像することができ、抽象的概念、数や持続の観念を持ち、一般のおよび特殊な真理を認識し、欲望を形づくり、情念を抱き、愛し、憎み、意志する。また希望し、恐怖し、驚愕することができ、最後に、諸々の習慣をつくるということを証明したのであるから、唯一の感官をもってしても、知性（entendement）は五感をそなえるのと同じ機能を持つ、と我々は結論すべきである。<sup>20</sup>

『感覚論』において、知性の働きは感覚に基づいている。後の『動物論』（1755年）では、心の様態は大きく知性と意志に分類される。知性は「様々な観念を受け入れ、それらについてあれこれと判断をする機能（*faculté*）とみなされるもの」、意志（*volonté*）は「心の運動とみなされるもの」である。そして、両者は思考ないし精神（*esprit*）の働きをクラス分けしたものにすぎないとされた。また先の『感覚論』の引用を彷彿とさせる次のような記述がある。

注意を向け、思い出し、想像し、比較し、判断し、反省することは、知性に関連した思考のあり方である。欲望し、愛し、憎み、あれこれの情念を抱き、恐れ、希望することは、意志と関連した思考のあり方である。そしてこのふたつの能力は、感覚（*sensation*）のなかに、一つの共通した起源をもっているのである。<sup>22</sup>

知性と意志に関連した思考の在り方という精神の機能に共通する起源とは、感覚である。知性も意志も人間と獣に共通のものである。獣は心にとって習慣となった働きしか行わない。対して、人間ではこれらの能力が拡大し、反省によって統括されるような機能にまで到達している<sup>23</sup>。以上を踏まえて『感覚論』の先の引用を再読するならば、唯一の感覚である嗅覚に限られた彫像でさえ、知性と意志に関連した思考等の精神の働きを行うので、五感をそなえた場合にも同様の結論が得られると言える。かくして彼は嗅覚を出発点として、精神のあらゆる機能が感覚に帰せられると示した。

彫像を思考実験に用いたことには賛否両論がある。例えば、ミッシェル・セールはこの動かない彫像を「死骸」と呼び、コンディヤックが死した状態を措定し、感覚や認識について論じたことを、「死体の解剖」と批判した<sup>24</sup>。これに対し谷川渥は、死せる彫像が石から生命を獲得する「哲学的寓話、一種のピュグマリオン物語のために要請された」<sup>25</sup>と述べ、コンディヤックを擁護



した。セールが指摘するように、感覚と認識を考察するために生きた状態ないし人間を想定しないことは、人間が外界をいかに理解するかについて説明する意図と合致せず、適切とはいえない。シャンタル・ジャケの言葉を借りるならば、「嗅覚しかない人間という虚構はありえないもの」<sup>26</sup>である。しかし、ジャケがこれを「感覚論的理論のもっともらしさを真実へと変えるための代償」<sup>27</sup>として受け入れるように、各感覚を段階的に吟味し、精神が行う活動を獲得していく過程と感覚が精神の機能の源泉であることを解明するためには、この方法を取る必要があった。

コンディヤックは、最も精神の認識に貢献しないと思われる嗅覚を機縁として、人間の精神能力が感覚の変形であることを示した。彼の理論は、五感における嗅覚の重要度の向上を説くものではない。しかし、彼がプラトンからデカルトに至るまで主題にされることが少なかった嗅覚をあえて取り上げ、匂いの感覚に我々の注意を向けさせたこと、また嗅覚を感覚主義のもとに再考したことは、嗅覚の哲学的研究において重要な意味を持つ。

### 3. 自然と文明——ルソー

コンディヤックの『感覚論』の影響を受けたジャン・ジャック・ルソーは『エミール』(1762年)<sup>28</sup>を著し、先天的に与えられた理性を用いた教育ではなく、感官の育成を通じて理性そのものを形成する自然教育について論じた。それは人間の認識が発達する自然な順序であるとされた。その過程をルソーは次のように説明する。

人間の知性 (entendement) に入ってくるすべてのものは、感官 (sens) を通って入ってくるのだから、人間の最初の理性は感覚的理性 (raison sensitive) だ。それが知的理性 (raison intellectuelle) の基盤になっているのだ。我々の最初の哲学教師は、我々の足であり、手であり、目である。<sup>29</sup>

ルソーにおいてもコンディヤック同様、感覚が知性の源泉である<sup>30</sup>。感官を介し形成される理性のうち感覚的なものが知的なものの根拠となる。「感覚的理性」は「知的理性」の前段階であり、感性から理性へと至る中間概念として措定されている。「感覚的理性」あるいは子どもの理性は「多数の感覚的印象を総合し、単純観念」を、「知的理性」あるいは大人の理性は「いくつかの単純観念の総合によって、複合的観念」を構成する<sup>31</sup>。さらにルソーは第六感ともいうべき共通感覚 (sens commun) にも言及した。これは頭脳の中にだけあり、純粹に内面的なその感覚は知覚あるいは観念と呼ばれる。知識の広さは観念の数で測られ、精神の正確さは観念の明確さ、明瞭さにより作り出される。人間の理性はこうした観念を比較する技術だとルソーは主張した。また先の引用は、感官を介して、感覚 (sensation) を受け取り、それを組み合わせることで観念を形成する人間の知的能力の発達についても説明している。

では、ルソーは嗅覚をどのように論じたのだろうか<sup>32</sup>。彼は鋭敏な嗅覚を持つカナダの未開人の例について取り上げている。「カナダの未開人は若いときから非常に鋭敏な嗅覚を持ち、犬がいてもそれを狩りにおいて用いようとはせず、自分で犬の役割りを果たす」<sup>33</sup>。未開人は子ども同様、理性の使用法を知らない。ルソーの合理主義について考察したドゥラテによれば、理性は人間が自然状態から離れ、文明状態へ移行する時、発達する<sup>34</sup>。自然状態である原始的な未開人

は、先の例が示すように鋭い嗅覚を持つ。そのため嗅覚の鋭さは自然状態の証である。実際、人間の嗅覚は多くの野生動物に比べ、著しく鈍いために、鋭敏な嗅覚はしばしば原始的、動物的あるいは野生的とみなされてきた。文明社会で生きる人間の嗅覚は、それとは異なる。嗅覚は自然状態と文明状態という区分を適用できる感覚なのだ。

ジャケは、「未開人と文明人を区別するための一つの基準は嗅覚の範疇にある」<sup>35</sup>と述べ、生理学者ハラーが紹介した例を挙げている。「砂漠で育った子どもが、まるで雌羊がするように、草をかぎ、食べる分を鼻で選ぶのが見られた。社会に出て別の食物に慣れて、子どもはこの特性を失った」<sup>36</sup>。ジャケが指摘した点以外にも、この逸話からは三つの側面を読み解くことができるだろう。第一に動物の鼻は安全な食物を嗅ぎ分けられることである。鋭敏な嗅覚が生命維持のために必要不可欠であることは、古代ギリシア以来、繰り返し説かれる嗅覚の特性である。にもかかわらず、人間の嗅覚は多くの動物に比べ、低い身体的機能しか持たない。それが嗅覚を劣った感覚とみなす原因であった。第一は自然状態の嗅覚に当たる。第二に砂漠つまり野生に近い状態で育った人間の子どもは、修練することで嗅覚を強化し、動物に匹敵するような優れた機能を持つことである。第二はルソーが指摘する教育による感官の強化に該当する。第三に文明社会では訓練で培った嗅覚の優れた機能は損なわれ、いわば退化することである。第三は文明状態における嗅覚の鋭敏さの後退を表す。ジャケは、第二を第一に組み入れ、第三と比較することで、嗅覚の優劣が未開と文明を隔てる一つの指標となることを導き出した。しかし、ルソーの論述に立ち返るならば、嗅覚の優劣の背後には、理性の発展段階の違いがある。匂いを嗅ぎ分けることに秀でた自然状態の嗅覚においては、理性の発展の進捗と感覚の鋭敏さが相反するのだ。

さらに「嗅覚は想像力の感覚である」<sup>37</sup>とルソーは語る。彼は嗅覚が想像力を刺激し、それが与えるものよりも、期待させるものによって影響を及ぼすとし、三つの例を挙げた。まず、彼は死んだ馬肉の悪臭を心地よく感じる例を用い、生活様式の違いにより匂いに対する快・不快の判断が異なることに言及した。次に、彼は嗅覚が恋愛においてもたらす影響、例えば愛する人が胸元にさしている花の芳香によって想像力がかきたてられ、気持ちが高揚することを挙げ、感情と匂いが結びつくと言った。最後に、彼は子どもに薬を与える時、苦い薬を快い香料で包んだ場合を取り上げ、強く想像した嫌な匂いの方が呼び起こされると述べた。このうち、第二の例に注目する。これによって、ルソーは嗅覚と想像力が同時に働く時、匂いが感情を喚起することを説明する。古くから匂いが感情と結びつくことは広く知られていた。この時、感情とは快・不快のことを指していた。だが彼は、この例において、想像力を介して、本来、匂いから抱くはずのない観念を嗅覚と結びつけることによって、喜びや苦しみといった感情を持つと示した。この種の匂いに敏感なのは、大人である。というのも、「子どもはそれ（感官）に他のいかなる観念も結びつけない」<sup>38</sup>からだ。先述の通り、大人はより複雑な観念を構成する「知的理性」を有する。したがって、これが子どもや未開人よりも発達した大人は、想像力の感覚としての嗅覚が鋭敏であるから、この感覚の鋭さと理性、とりわけ、その知的側面の形成の度合いが関連すると指摘できる。また想像力の感覚とされる嗅覚は、第二の例から分かるように文明状態において確認できる。理性の形成段階が身体的能力と反比例する自然状態の嗅覚だけでなく、それが匂いと観念を関係づける能力と比例する文明状態の嗅覚を考察することで、人間の知的能力の発展と連動する嗅覚の存在が明らかになるのだ。

自然状態と文明状態の嗅覚は、アニック・ル・ゲレによる「動物と未開人に共通の原始的な嗅覚」と「文明化された人間に備わる洗練された嗅覚」<sup>39</sup>という分類と一致する。ゲレは前者が本能に、後者が理性に導かれると主張した。厳密に言えば、前者は感覚的理性の段階にあり、身体的機能の点で優れ、後者は知的理性の段階にあり、匂いと観念を想像力によって結びつける。

嗅覚に関してルソーは鋭敏さにほとんど意義を見出さず、自然状態であることを重視しなかった<sup>40</sup>。ラヴジョイは『不平等起源論』における原始主義を論じる際、「自然状態には望ましい側面があるとはいえ、このような事実上の白痴状態…【中略】…が、人間にとって理想状態であると自分がみなしているように理解されることを、ルソーが望んでいたであろうとは…【中略】…まず考えられない」<sup>41</sup>と語った。『エミール』で展開した嗅覚の考察に関しても同様のことが言えるだろう。元来、嗅覚は知的なものとの関係を持たないために低級感覚であった。ジャケは「嗅覚の弱さは、動物に対して知性において優勢にたつ人間の力の証拠となる」<sup>42</sup>と主張した。ルソーは知的能力と連動する想像力の感覚たる嗅覚へ言及することによって、従来の嗅覚論に一石を投じ、人間に特有の嗅覚の考察を可能にした。そしてその背景には、コンディヤックから引き継いだルソーの感覚論的な理論の存在がある。

#### 4. 嗅覚と味覚——ブリア＝サヴァラン

嗅覚を論じる際、特に類縁性を指摘される感覚として、味覚がある。この二つの感覚が親密な関係であると主張する説は、古代ギリシアにまで遡る。例えば、アリストテレスは『靈魂論』において「嗅覚は味覚に対して類比関係を持っているし、また同様に味の種類は臭いの種類に類比関係を持っているようだ」<sup>43</sup>と述べた。ただし、味覚の方がより精緻なものとする。なぜならば、人間が持つ最も精緻なものは触覚であり、味覚は一種の接触だからである。また、コンディヤックは二つの感覚には大きなアナロジーがあるため、時々、融合するに違いないと語り、ルソーは嗅覚が味覚を補助すると捉えている<sup>44</sup>。

「五つの器官感官のうち報いが最も少なく、したがってまた一番なくてもいいと思われる感官はどれだろうか。それは嗅覚の器官感官である」<sup>45</sup>との見解から、嗅覚を五感の中で最も低いものとみなしたドイツの哲学者カント（Immanuel Kant, 1724-1804）も、両者が近い関係にあることを認めている。

味覚と嗅覚の感官は二つとも、客観的である以上に主観的である。味覚は舌、喉、口蓋の器官に外的対象が接触することによっており、嗅覚は空気と混ざって外から入ってくる発散性の物質を吸うことによるのだが、後者の場合、その発散性物質を出す物体そのものは嗅覚器官から離れていてもかまわない。二つの器官はお互いにごく近い親戚関係にあって、だから嗅覚が鈍い人は例外なく味覚も鈍感である。<sup>46</sup>

19世紀に入ると、嗅覚と味覚の類縁性をより明確に示す例が現れる。それが味覚の側から嗅覚との関連について言及したジャン・アンテルム・ブリア＝サヴァランの理論である。食通として名高い彼は、著書『味覚の生理学』（1825年）において、味覚を人間の原初的な感覚とみなしている。一般に、最も原初的な感覚とされるのは触覚であるため、彼の説は特殊だと言える。彼は

味覚と嗅覚の分かちがたい相関関係を認め、味覚は「嗅覚からの強力な援助を受ける」<sup>47</sup>と述べる。この論考によれば、人間の味覚は三つの点から考えることができる。第一に味わいを評価するための感覚器官という肉体的側面、第二に味わいのある物体によって、刺激を受けた器官が中枢部に働きかけた結果生じる印象という心理的側面、第三に味わいを評価する器官を刺激し、印象を生じさせる物質という物理的側面である。第一と第二は受容者に属し、第三が味を有する物体すなわち有味体<sup>48</sup>に属する。また、第一は感覚器官、第二は味から受ける印象である。味覚はしばしば主観的だとされるが、その一因は第二の点で指摘されるように、味わいの印象が普遍的とは言い難いからであろう。

プリア＝サヴァランは、さらに味覚には二つの働きがあると表明する。一つは快感に働きかけ、生命の営みのために絶えず生じる消耗を補うように私たちを導く働き、もう一つは自然の中にあるさまざまな物質から栄養となるものを取捨選択する働きである。これらの味覚の働きをサポートするのが嗅覚である。味覚にとって嗅覚が果たす役割はそれだけではない。嗅覚を奪われると味覚が麻痺する。病気等で鼻が正常に機能していない時、舌は正常であっても味がしないことを多くの人が経験的に知っているだろう。鼻をつまんで物を食べた時、舌を口蓋につけたまま物を飲み込む時も同様の結果が得られる。したがって、嗅覚は味覚にとってなくてはならないものである。そのため、彼は以下のように述べる。

いつのまにか嗅覚に、それに所属している権利を返還し、それが味わいの評価において、われわれのためにしてくれている奉仕を認めてやらなければならない時機に達した。…【中略】…ところがわたしは、単に嗅覚の参加なくしては完全にものを味わうことはできないのだと確信しているばかりでなく、さらに進んで嗅覚と味覚とは両々相和して一つの感覚を作っているのであって、口はその実験室、鼻のほうはその煙突なのだ、とまで信じたくなっているのである。<sup>48</sup>

もはや味覚は嗅覚と別の感覚ではなく、共に一つの感覚を形成していると信じたいほどだと彼は語る。ロラン・バルトはこの著書の読解の中で、味覚と時間の関係について考察した。彼は『味覚の生理学』に登場する水蜜桃の例に基づき、時間差で起こる段階が味覚に影響を与えるため、味覚の働きが時間に依存すると考え、芳香や残り香を「時間化された味覚」<sup>49</sup>とし、嗅覚を味覚の一部とみなす。この主張の根拠となった事例は次のようなものである。

例えば、水蜜桃を食べる人は、まず第一にそれから発する快い香りに打たれる。それから彼は、桃を口の中に入れる。そして清々しい酸味を感じて、ますます良い気持ちになる。けれども本当に香気を感じられるのは、彼が飲み込もうとする時、口の中の物がちょうど鼻腔の真下に来る時で、ここにいたって初めて、一個の桃が生じさせる感覚が完成されるのである。そして、飲み込んでしまってから初めて彼は、そのいま感じたことを判断して、「これはうまい」とつぶやくのである。<sup>50</sup>

水蜜桃の例は味覚の三つの異なる感覚、すなわち直接感覚、完全感覚、反省感覚を説明する。



直接感覚は味わうものが舌の前部に残っている時に口腔内の諸器官がすぐに活動を開始することから生まれる第一印象である。完全感覚は食物が咽頭部の後方に移り、鼻腔を含むすべての器官が働き、味わいと匂いを完全に評価する時に得られる。反省感覚は嚥下した後、感じたことについて心が行う判断である。これらは段階を追って時間の経過と共に得られ、バルトが指摘するように各々の段階で香りが影響を及ぼす。だからこそ、彼は食物に関する嗅覚を時間化された味覚と呼び、この三つの段階にこそ味覚の贅沢たる所以があると述べた<sup>51</sup>。ジャケが「鼻の使命は、ブリア＝サヴァランの言葉によれば、味覚の『歩哨』である」<sup>52</sup>と語る時、水蜜桃を食べようとする人が芳香に打たれることに限定されている。だが、ブリア＝サヴァランは前段階だけでなく三つの段階で感じられる匂いすべてが味わいの評価に不可欠だと考えている。

以上のことから嗅覚は味覚と分かち難く、味わうための重要な役割を担っており、嗅覚は匂いだけでなく味わいの認識に貢献するため、二つの感覚にまたがる機能を備えていると言えるだろう。つまり、味覚と嗅覚という二つの感覚は協働するのである。両者の関係は相互補完するというよりは、むしろ嗅覚が味覚を補っている。匂いには通常、持続性や永続性がない。時間の経過と共に匂いは薄れるからだ。『味覚の生理学』における水蜜桃の例は、こうした匂いと時間の関係を新たな角度から解き明かしたものである。

ブリア＝サヴァランの理論は生理学に基づく分析であり、コンディヤックが主張するような感覚から精神へと至る道筋を考察することも、ルソーが指摘するような嗅覚の想像力にかかわる知的ないし理性的側面に言及することもない。したがって、コンディヤックとルソーの感覚論的思想とブリア＝サヴァランの生理学的分析との間には分節が存在し<sup>53</sup>、ここに匂いの哲学における一つの分岐点がある。

## 5. おわりに

嗅覚は五感の内、主題となることが最も少ない感覚である。古代ギリシア以来、鼻が他の動物に比して鈍感であること、匂いが一過性のものであること、嗅覚が主観的感覚とみなされることが、嗅覚の考察を困難にしている。しかし、18世紀のフランスではこの感覚が論じられた。本稿ではこの点に着目し、18世紀のフランスに匂いの哲学の転換があるのではないかという考えのもと、この時代の嗅覚論を検討した。

第1章では、18世紀以前のフランス哲学における嗅覚論を確認するため、デカルトの嗅覚に関する思索を概観した。彼にとって、感覚は誤謬の契機となるものであった。そして感覚することは思惟することとみなされた。感覚自体が低いものとして扱われたが、嗅覚は五感の内でも中間位であった。その後、18世紀の認識論はデカルト的合理主義から感覚論へと移行し、嗅覚が論点になり始める。よって認識論の移行が嗅覚を考察する土壌を準備したのではないかと仮定した。

第2章では、コンディヤックが『感覚論』の中で展開した思考実験における最初の段階、すなわち、嗅覚だけが付与された彫像を勘考した。この著作で、彼は精神が感覚の変形であることを明らかにした。彼の感覚論は、五感における嗅覚の地位の向上を説くものではなかった。しかし、彼の理論は、デカルトではほとんど研究されなかった嗅覚を考える機縁となっただけでなく、ルソーの思想に影響を与えた。

第3章では、ルソーにおける嗅覚が、理性の発展段階と関係することを、自然状態の嗅覚と文

明状態の嗅覚との比較によって解明した。彼の主張において特異なのは、嗅覚を想像力の感覚とみなすことであった。この感覚を持つことができるのは大人だが、それは「知的理性」を獲得しているからである。ルソーの感覚論的思想は、知性と程遠い感覚とされてきた嗅覚を、知的側面から検討することを可能にした。

第4章では、ブリア＝サヴァランの論考から嗅覚と味覚が二つで一つの感覚と言っても過言ではないほど協働して、味わいの評価に寄与することを確認した。19世紀に出版された『味覚の生理学』では、コンディヤックやルソーとは異なり、生理学的な側面が強調され、嗅覚の分析にも変化がみられる。したがって、これらの間には分節が認められる。

以上を総括すると、フランスにおける18世紀の認識論がデカルト的合理主義から感覚論へと移行したこと、そして19世紀の思想が感覚論から生理学的思想へと変化したことが、嗅覚の哲学的考察にとって転機になったと言えるだろう。したがって、18世紀フランスに匂いの哲学における一つの転換が存在している。

## 註

- 1 デカルトの原典は以下のアダン・タヌリ（AT）版により巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。René Descartes, *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Paris: J. Vrin, 1996. 邦訳は『デカルト著作集』（全4巻）、三宅徳嘉他訳、白水社、1973年を参照し、一部に変更を加えた。邦訳は初出の場合のみタイトルを記し、巻数と頁数をアラビア数字で示す。
- 2 AT, VIII, 315-316., IX, 310. 『哲学原理』、所収『デカルト著作集』第3巻、146頁。
- 3 AT, VI, 109. 『屈折光学』、所収『デカルト著作集』第1巻、134頁。
- 4 Maurice Merleau-Ponty, *L'Œil et l'Esprit*, Paris: Gallimard, 1999, p.51. メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1999年、278頁。
- 5 『人間論』をデカルトは1632-1633年頃、執筆したとされるが、刊行されたのは彼の死後である。また嗅覚についての論述は、ここで挙げた著作以外に『動物の発生についての最初の思索』（AT, XI, 533. デカルト『医学論集』山田弘明他訳、法政大学出版局、2017年、133頁）、『人体の記述』（AT, XI, 263. 同書、181-182頁）にも登場する。前者は嗅覚と直接関係がない。後者では嗅覚と微粒子の関係が語られている。
- 6 AT, VIII, 318-319., IX, 313. 『デカルト著作集』第3巻、149頁。『人間論』には、鼻孔を通り抜けられる大きさの粒子を匂いと呼ぶ、とある（AT, XI, 148-149. 『人間論』、所収『デカルト著作集』第4巻、245頁）。デカルトは「まえに《匂い》と名付けた」と記し、別の著作でも匂いに言及したとする。しかし、ルイ・ド・ラ・フォルジュの註には「この作者の刊行された著作の中で、物質のいかなる粒子にも《匂い》という名前が与えられたのを見たことがない」とあり、矛盾が指摘されている（AT, XI, 148a. 同書、291頁、註41）。この点に言及しているのは、メルセンヌ宛て「1640年9月30日付書簡」においてである。ここには「花から発せられる大量の香りに関しまして、これが大量であることは、香りを構成する諸部分が非常に小さなものであることに由来します」（AT, III, 193. 『デカルト書簡集』第4巻（1640-1641）、大西克智他訳、知泉書館、2016年、169頁）とあり、デカルトが匂いの粒子を小さいものだと考えていたことが確認できる。
- 7 AT, VI, 81. 『デカルト著作集』第1巻、113頁。
- 8 AT, XI, 5. 『宇宙論——または光についての論稿』、所収『デカルト著作集』第4巻、132頁。
- 9 Martin Jay, *Downcast Eyes, The Denigration of Vision in Twentieth-century French Thought*, Berkeley:

University of California Press, 1994, chap.1.

尚、プラトンにおける視覚優位説は、『パイドロス』250D（所収『プラトン全集』第5巻、藤沢令夫訳、岩波書店、1974年、190頁）ならびに『ティマイオス』47A（所収『プラトン全集』第12巻、種山恭子他訳、岩波書店、1975年、70頁）に確認できる。

- 10 プラトンは、特定の条件の下、例えば、湿気を含む、腐敗する、溶ける、煙るなどでしか匂いを感じられない物質があることを根拠に、そもそも『『匂い』』というのはすべて、中途半端なもの』であると述べている（『ティマイオス』66D、同書、120頁）。
- 11 坂部恵『ヨーロッパ精神史入門——カロリング・ルネサンスの残光』岩波書店、1997年、88頁。これにより「知性」は、通常の日本語訳では「悟性」とされるようになったと坂部は指摘する。
- 12 コンディヤックの『感覚論』は Étienne Bonnot de Condillac, “Traité des sensations”, dans *Œuvres philosophiques de Condillac*, vol. I, Paris: Presses Universitaires de France（以下、P.U.F. と略す）、1947を参照した。邦訳はコンディヤック『感覚論』上巻、加藤修一・三宅徳嘉訳、創元社、1949年を参照し、訳語、仮名遣い等に変更を加えた。
- 13 *ibid.*, p.222. 同書、67頁。
- 14 彫像は外部の対象を判断する際に活躍しないと考えられるものから嗅覚、聴覚、味覚、視覚の順に感覚を付与される。触覚は唯一、外在性の観念を獲得し得るため、他の感覚とは分けられた。デカルトが触覚の確実性を重視し、『哲学原理』において真っ先にこの感覚を論じたのに対し、コンディヤックは触覚を最後に論じた。
- 15 Condillac, *ibid.* 同箇所。
- 16 *ibid.*, p.224. 同書、75頁。
- 17 アリストテレス「鼻に関する諸問題」962b11-12、所収『アリストテレス全集』第11巻、戸塚七郎訳、岩波書店、1968年、454頁。
- 18 Condillac, *op.cit.*, p.231. コンディヤック、前掲書、97頁。
- 19 デリダは『感覚論』における欲望（*désir*）と欲求（*besoin*）を詳細に論じ、欲望が欲求の対象であり目的だと主張した。Jacques Derrida, *L'archéologie du frivole*, Paris: Denoël/Gonthier, 1976, p.121. ジャック・デリダ『たわいなさの考古学——コンディヤックを読む』飯野和夫訳、人文書院、2006年、134頁。
- 20 Condillac, *op.cit.*, p.239. コンディヤック、前掲書、122-123頁。entendement は「悟性」と訳される語である。ここではカントの「悟性」と区別するため（註11参照）、「知性」と訳出した。
- 21 Condillac, “Traité des Animaux”, dans *op.cit.*, p.377. コンディヤック『動物論』古茂田宏訳、法政大学出版局、2011年、165頁。邦訳では *ame* に魂の訳語が当てられている。本稿では統一の関係上、心に変更した。
- 22 *ibid.*, p.378. 同書、166頁。
- 23 *ibid.* 同書、169頁。
- 24 Michel Serres, *Les cinq sens*, Paris: Grasset, 1985, p.207. ミッシェル・セール『五感——混合体の哲学』米山親能訳、法政大学出版局、1991年、299頁。
- 25 谷川渥「花の彷徨——カントからユイスマンスまで——」、所収『文学』第5巻第5号、岩波書店、2004年、38頁。
- 26 Chantal Jaquet, *Philosophie de l'odorat*, Paris: P.U.F., 2010, p.410. シャンタル・ジャケ『匂いの哲学——香りたつ美と芸術の世界』岩崎陽子監訳、晃洋書房、2015年、264頁（以下、邦訳を参照する際、一部に変更を加えた）。
- 27 *ibid.* 同箇所。

- 28 『エミール』はJean-Jacques Rousseau, “Émile: ou, de l'éducation”, dans *Œuvres complètes*, vol. IV, Paris: Gallimard, 1969. ならびにジャン・ジャック・ルソー『エミール』上・中巻、今野一雄訳、岩波書店、2002、2007年を参照し、邦訳には変更を加えた。
- 29 *ibid.*, p.370. 同書、上203頁。コンディヤックの場合と同様に、*entendement* は「知性」で統一する（註20参照）。
- 30 それは以下のことから明らかである。「私は存在する。そして感官を持ち、その影響を受ける。これが私の行き当たる、そして私が同意せざるをえない第一の真理である」（*ibid.*, p.570. 同書、中167頁）。グイエはルソーがこの箇所でデカルトの『方法序説』を模倣したと指摘する。だがルソーが感官を持つ私を説明なく第一の真理としたため、表面的模倣だとした。さらに『『感覚論』を開くために『方法序説』を閉じなければならない』と述べ、コンディヤックの理論との類似性を示唆した。Henri Gouhier, *Les méditations métaphysiques de Jean-Jacques Rousseau*, Paris: J. Vrin, 1970, p.69.
- 31 Rousseau, *op.cit.*, p.417. ルソー、前掲書、上270頁。
- 32 ルソーは五感の中で最も頻繁に使用されるのは触覚であり、これは他のどの感官よりも不完全で粗雑だが、触覚による判断は最も確実だとした。さらに、触覚は視覚と同時に用いられるので、目が手よりも早く対象を捉えたと考えた（*ibid.*, pp.388-389. 同書、上229頁）。視覚に関しては、あらゆる感覚のうちで精神の判断と最も切り離せないものだと主張した（*ibid.*, p.396. 同書、上240頁）。彼は視覚と触覚を比較しながら、二つの感覚について考察する。感覚の階位について、ルソーは古代ギリシア以来の伝統を踏襲した。また、嗅覚は味覚との対比で語られ、「味覚に対する嗅覚は、触覚に対する視覚のようなものだ。嗅覚はいろいろな物質がどんなふう to それを刺激するのかを味覚よりも先に知り、味覚に注意してやる」（*ibid.*, p.415. 同書、上268頁）とされ、匂いがどのような味であるのかを予告すると述べる。
- 33 *ibid.*, p.416. 同書、上269頁。
- 34 Robert Derathé, *Le rationalisme de Jean-Jacques Rousseau*, Genève: Slatkine Reprints, 1979, p.13.
- 35 Jaquet, *op.cit.*, p.32. ジャケ、前掲書、19頁。
- 36 *ibid.* 同箇所。尚、この例をジャケはアラン・コルバンの著書の註から取っている（Cité par Alain Corbin, *Le miasme et la jonquille, L'odorat et l'imaginaire social, XVIIIe-XIXe siècles*, Paris: Aubier, 1982, p.273）。
- 37 Rousseau, *op.cit.*, p.416. ルソー、前掲書、上269頁。
- 38 *ibid.* 同箇所。
- 39 Annick Le Guérér, *Les pouvoirs de l'odeur*, Paris: Odile Jacob, 2002, p.178. アニック・ル・ゲレ『匂いの魔力——香りと匂いの文化誌』今泉敦子訳、工作舎、2000年、199頁。
- 40 Rousseau, *op.cit.*, p.417. ルソー、前掲書、上270頁。
- 41 アーサー・O・ラヴジョイ『観念の歴史』鈴木信雄他訳、名古屋大学出版会、2003年、19頁。
- 42 Jaquet, *op.cit.*, pp.30-31. ジャケ、前掲書、18頁。
- 43 アリストテレス『靈魂論』421a18-19、所収『アリストテレス全集』第6巻、山本光雄訳、岩波書店、1988年、70頁。
- 44 Condillac, “Traité des sensations”, p.243. コンディヤック、『『感覚論』、135頁。Rousseau, *op.cit.*, p. 415. ルソー、前掲書、上268頁（註32参照）。
- 45 Immanuel Kant, *Anthropologie in Pragmatischer Hinsicht* (1798), in *Kant's gesammelte Schriften*. Herausgegeben von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Band VII, Berlin: G. Reimer, 1917, S158. イマヌエル・カント『実用的見地における人間学』、所収『カント全集』第15巻、渋谷治美他訳、



岩波書店、2003年、70頁。味覚はこの感覚による享受の際に社交性を促進する、食物が滋養になることを予め判定するという特有の長所を持つため、嗅覚よりも高級だとカントは主張した。この引用箇所を根拠に、カントは嗅覚の哲学的研究において、しばしばこの感覚を冷遇した代表的人物の一人と評される。

46 *ibid.*, S157. 同書、67-68頁。カントは味覚と嗅覚の特徴の違い、すなわち、器官と外的対象との距離の差について指摘する。味覚は接触という観点で言えば、触覚に近い性質を持つ。にもかかわらず、味覚は嗅覚に近い感覚であるとされる。その理由を二つの感覚が共に「塩類に触発される」からだとした。

47 Jean Anthelme Brillat-Savarin, *Physiologie du goût*, Paris: Hermann, 1981, p.48. ブリア＝サヴァラン『美味礼讃』上巻、関根秀雄・戸部松美訳、岩波書店、1967年、62頁（以下、邦訳を参照する際、一部に変更を加えた）。

48 *ibid.*, p.51. 同書、68頁。

49 Roland Barthes, *Lecture de Brillat-Savarin*, dans Brillat-Savarin, *op.cit.*, p.8. ロラン・バルト『＜味覚の生理学＞を読む』松島征訳、みすず書房、1985年、3頁。

50 Brillat-Savarin, *op.cit.*, p.52. ブリア＝サヴァラン、前掲書、70頁。

51 Barthes, *ibid.* バルト、同箇所。

52 Jaquet, *op.cit.*, p.29. ジャケ、前掲書、17頁。

53 この思想の流れにおいて、嗅覚が生理学的側面から考察される例を挙げるとすれば、『百科全書』およびディドロの『生理学要綱』であろう。Cf. Denis Diderot, “Éléments de physiologie”, dans *Le rêve de d’Alembert, Œuvres complètes*, t.17, Paris: Hermann, 1987, p.450.

